市仏連会報

発行所
横浜市中区大平町96
光明山西有寺内
横浜市仏教連合会
電話045（661）0166

龍年を迎えて

横浜市仏教連合会専務理事　玄野孝善

今年は龍年であります。懐かしい友人からいただいた年賀ハガキ等に龍の絵がきめこまかに書いてありますと、なんともいえないほのぼのとしたものが、心に伝わってまいります。

皆さんの中にも今年が自分の干支（えと）にあたるかたも多いと思いますので、龍にちなんだお話を一つ。

タツドシ、たつどしといいます。「龍年」と書くかたもいますし「辰年」と書く人もいます。「辰」という字はおもに十二支の一つであって、方角とか時刻を示すときに用います。

方角ですと東南東、時刻では午前八時ころを示します。よって、「たつどし」では「龍年」と書いたほうがよいと思います。

「龍」とはいったいどんなものなのでしょうか。龍とはリュウとか、リョウとか、ロウとか、ボウ（バウ）とか、たつ、いつくしみ、まだらなんて読みかたもいろいろありまして、意味もまたいろいろあります。

「龍」とは、想像上の神霊な動物であって、四霊の一つで雲を起し雨を呼ぶといいます。その龍にもいろいろあって、うろこがあるものを蛟龍といい、翼があるものを応龍といい、角のあるものをキュウ龍といい、角のないものをチ龍といい、まだ天にのぼらないものを蟠龍といいます。

まあなんとも、りゅうりゅうとしておりまして、私にも良くわかりません。そこでわかりやすいお話を一つしてみましょう。

皆さんは墨絵で龍が玉をもって天にのぼってゆく絵を見たことがあると思いますが、本日は市仏連副会長森山正城師のお書きになった龍（写真）をちょっとお借りして来ました。龍の世界も、大変にきびしいものがございます。

私たち親は子供によく勉強をしていい学校にゆけることを望んでいますが、龍もまた同じように天にのぼって大空を自由に飛べることを夢みて一生懸命努力をしております。

龍は、常に池の中の奥深くに住んでいます。そして泥に濁った水を飲んで生活をしておりますが、濁った水から出て大空を飛べる日を夢みて、毎日努力をしているのです。どんな努力をしているかと申しますと、その池に「キンカ鳥」という鳥が舞いおりて来るのをじっと待っているのです。

このキンカ鳥という鳥は、小さな金の玉を持っています。

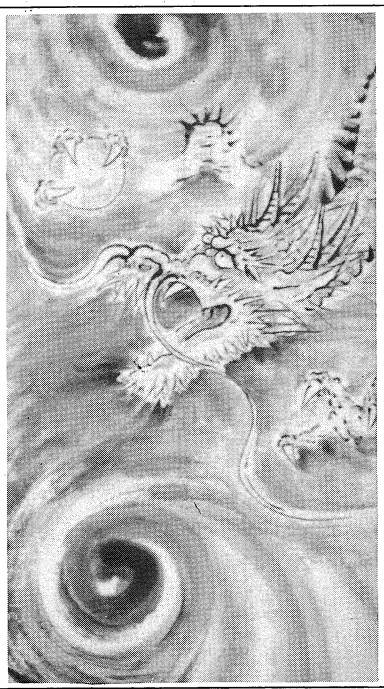
その金の玉をとってつかむと龍はみるみるうちに天に登っていくことができ、大望の大空を自由にかけずり回ることができるのであります。しかし、そのキンカ鳥という鳥がいつ池にあらわれるかわかりません。龍はなんとかして、キンカ鳥をつかまえて、金の玉を手に入れようと、日夜寝ることもなく池の中でひたすら待っています。我々は、一晩か二晩くらい徹夜しても、そうとうに苦しいものです。それを龍はずっと寝ずにキンカ鳥のばんをしているのですから、その努力とやら大変なものです。

そしてキンカ鳥をとり金の玉を手に持ちますと、その金の玉は、みるみる大きくなり龍は天に登ってゆきます。それを墨絵に書いたものが、森山師の絵（写真）です。

その絵は、たゞの龍の絵だけではないのです。それもまた意味があります。

我々人間社会を龍の世界におきかえて考えてみますと、苦しいことがあっても、ひたすら努力をすれば、やがて自分も龍が天をかけ回るように望みをかなえることができるという教えであります。

やはり何ごとも努力が大切なのです。この龍にはそのような教えがあるのです。



お詫び

市仏連会報第二六号発刊に際し、各地区会長様並びに関係者よりご協力頂きました貴重なる原稿を印刷会社の思いがけない事情により記載出来なくなりました。私の不徳の致すところでございます。深くお詫び致します。

今後はこのような事がおきませぬように十分気をつけてまいります故、ご容赦お願い申し上げます。

市仏連副会長　森山　正城

この度は弊社の不注意により市仏連様からお預り致しました貴重なる原稿を紛失してしまい取りかえしのつかないことをしてしまいました。誠に申し訳ございません。深くお詫び申し上げます。

横浜市西区戸部町一ノ十三
㈱佐藤印刷所　社長　佐藤　利夫

祈万福多幸

神奈川県仏教会長
横浜市仏連参与　新善光寺住職
福永隆昭
南区三春台一三三

横浜市仏教連合会会長
観音寺住職
柳下隆侃
港北区篠原町二七七七

横浜市仏教連合会副会長
大円寺住職
佐藤泰心
中区大平町九四

横浜市仏教連合会副会長
福聚寺住職
森山正城
保土ヶ谷区岩井町五六

横浜市仏教連合会専務理事
長昌寺住職
玄野孝善
旭区さちが丘五九

横浜市仏教連合会会計
弘聖寺住職
内野公雄
緑区台村町五九四

横浜市仏教連合会会計監査
正泉寺住職
野沢隆幸
鶴見区生麦四―三一

西区仏教会長
円満寺住職
西郊良光
西区久保町五〇―一

緑区仏教会長
福聚院住職
斉藤隆法
緑区池辺町二二九六

神奈川区仏教会長
薬王寺住職
黒多良弘
神奈川区七島町六

保土ヶ谷旭区仏教会長
長源寺住職
新井宝全
旭区上川井町二一四

横浜市釈尊奉讃会
会長
宇野忠夫
金沢区金沢町一

横浜市釈尊奉讃会事務局長
東林寺住職
滝田東潤
港北区篠原町一二五二

瀬谷区仏教会
事務局宝藏寺内
瀬谷区瀬谷五―三六

㈱東海ビーエス観光
神奈川営業所所長
真川明
南区西中町一―一九
東海ビル二〇一

南港南区仏教会長
常清寺住職
片山宣英
南区清水ヶ丘二三一

金沢区仏教会長
薬王寺住職
鹿野融雅
金沢区寺前二―一三

戸塚区仏教会長
高松寺住職
西尾俊雄
戸塚区戸塚四八四六

横浜市仏教連合会会計監査
松蔭寺住職
川上敬吾
鶴見区東寺尾一―一八

横浜市釈尊奉讃会会計
東照寺住職
程木徳明
港北区綱島西一―一三

横浜市釈尊奉讃会
会計
荻正義
港北区綱島台一〇―一〇

第十三回涅槃会開催

瀬谷区長天寺にて

横浜市仏教連合会では、恒例の釈尊涅槃会第十三回を迎え、無事円成することができた。

今回は瀬谷区仏教会が当番で、二月十三日(土)、臨済宗建長寺派の長天寺を会所として、善男善女約二百名の参列のもと荘厳に修行することができた。

瀬谷区仏教は、横浜市内で一番寺院数の少ない区で、八ヶ寺しかありません。

最初は心配もしましたが、瀬谷区仏教会の努力もあって、すばらしい涅槃会ができたことを心より深く感謝する次第である。

瀬谷区は、もと戸塚であったが行政により分区したものである。

何か行事を行うにも人数が少ないのでと区仏会長の藤村上人は言う。しかし、瀬谷区八福神というのがあって、すばらしい御珠印帳もあり、案内書もできている。

しかも八ヶ寺が良くまとまって何をするのにも手なれているようである。

さて、当日の午前十時に地区の寺院は集合して、準備に当り、特に長天寺の檀家世話人が多数お手伝いしているのには頭が下る思いをした。

午後一時横浜市釈尊奉讃会役員が受付けに立ち、地区の方々もお手伝いをいただき、一時半市仏連会長柳下隆侃師の導師のもと約三十人の僧侶と、二百余名の善男善女の読経が始まり、お焼香をして釈尊の供養の誠をつくした。

その後少々休憩をとって、第二部に入り市仏連会長、柳下隆侃師、市釈尊奉讃会長、宇野忠夫氏、県仏教会より、事務局長の本間孝観師、瀬谷仏教会より尾崎正悳師とそれぞれご挨拶をいたゞき、最後に会所の長天寺方丈より講師方丈の紹介をいただき、いよいよ記念講演となった。本日の講師方丈は鎌倉建長寺布教師、海老名竜峰寺住職大西幸道老師をお迎えして、「涅槃で待つ」と題して約一時間程の法話をいただいた。

法話の主旨としては、涅槃というものは、マッチの火をフッと消したように命が終った状態を言うが、命というものは、人の五感、眼、鼻、口、耳、それに体の表面と、意識が、きちんとしている状態で、それがなくなった時が死である。それを涅槃と言うが、その奥に理想境の意味もある。それは煩悩が消えた状態を涅槃の境という。我々も命を大切に生き、そして払っても払ってもわいて来る煩悩を打消し、涅槃の境（理想境）をめざして生活する事が大切であるというお話をいただき、午後三時半、市仏連副会長森山正城師の閉会の言葉でしめくくった。涅槃ダンゴの土産で帰路についた。

成道会

副会長　森山　正城

保土ヶ谷、旭区仏教会主催の成道会が、十二月五日、上菅田町福生寺に於いて、区内各寺院住職の協力によって、百数十名の檀信徒が集り盛大に行なわれた。

当日の記念講演は、臨済宗、安楽寺住職、小菅峻道師のご法話があり善男善女、皆真剣に拝聴した。法話の概略を記載します。

お話しは挨拶と云う題で始まり、挨拶は心の底から愛情をもって手を合わせる、又心の中で手を合わせお互いに心が一つにかよい合う、誠意の表われが挨拶である。時には挨拶の出来ない人もいるが悲しいかぎりである。

挨拶と云う字にはテ偏がついている。テ偏のつく字に持と云う字があります。一寸とお寺に関係があることで、お寺へお詣りする時お供物等を持ってみえますが、こんどはお寺から帰る時はご先祖様をお詣りして和尚さまから色々とお話しを聞き、心に安らぎを持って帰る。これをお寺では布施行と云っていますがお寺へ来たらよかったこと、悪かったこと何んでもお話し下さい。愚痴でも結構ですが人の悪口はいけません。

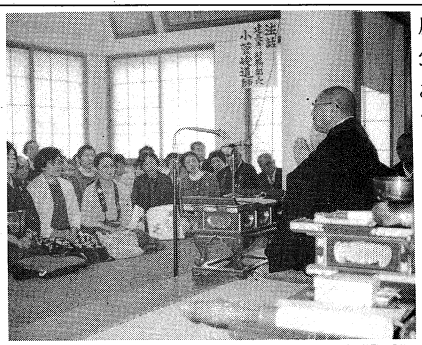
双方で布施を行なう、これを相互布施と申します。物と安心の施しです。

話しは変りますが、近頃よく聞く言葉で、今の若い者は老人の面倒を見てくれないと愚痴る人もいますが、自分自身が親の面倒を見てきただろうか、子供について真剣に教育を考えて育てゝきただろうか、子供は親の背中を見て育つとも云われます。時には例外もあるでしょうが、子供は親に似ているもので、両親がしっかりしていなくてはだめだと思います。

老いたら皆さんの邪魔にならないように気をつけてゆきましょう。

今年も、皆様方も正月をお迎えの事と思いますが、正月とは己の心を正しくする、そして寿命に向って一歩一歩進んでいる。朝、目がさめて今日も元気で朝が迎えられた、目出度い、この言葉の代表語が、正月の明けましてお目出とうと云う言葉です。

人は皆親のお蔭で生れて来たと云いますが、なかには勝手につくったのだと云う人もいるでしょうが、しかし我々は動物でなく人間として生れた喜びは皆あると思います。人間は子孫を育て、人間社会をつくり、平和で安らかな社会をつくって行かなくてはならない。そのためにも一生懸命生きて次の世代の人々を育てて行かねばならない。これが人間社会で繰り返されているわけです。考え方によっては親の恩は空気のようなもの、目にも見えず、何にも感ぜぬうちに生かされている。それが親の愛情かもしれない。父なくして子は生まれず、母なくしては子は育たず、夫婦は和合でなくて、共に和している。生まれも違い育ちも違うが、和していることを互いに認めてゆくことが平和な家庭の原点である。



駐車場をご利用下さい

南区堀ノ内町一―六八の宝生寺でございます。当方に檀務等でお出かけの際、駐車場にお困りの節はどうぞ私どもの駐車場を御利用下さい。目印に名刺又は数珠等を車内において下されれば幸です。

電話（七三一）二五四八